扶桑皇統記圖會 前編 五

遠
2505
13-5

遠
2505
13-5

扶桑皇統記圖會前編巻之五上下目録

上ノ
横佩右大臣初瀬祈子　中將姫誕生ミ立傳
右大臣東園の桃を愛し花の宴の圖
豐成迎後妻
繼母姦計說中將姫條
繼母毒計害却實子
再度姦計中將姫陷巧事

下ノ
繼子を殺さんとて却て實子を毒殺せるの圖
松井嘉兵太与國岳謀義
將監苦忠助中將姫

嘉兵太中將姫ゞ讀經を聞て善心ふかる圖
横佩大臣狩獵雲雀山　豊成於山中遇中將姫條
豊成公雲雀山ふ狩して中將姫ふ遭るゝ圖
中將姫於當麻寺得道　感得蓮曼荼羅條
継母の怨ヨ大毒蛇とる姫化度ふよう成佛さるの圖

目録終

扶桑皇統記圖會前編卷之五

浪華　好華堂野亭參考

横佩大臣初瀬祈子　中將姫縦生ゝる條

宝亀六年十月吉備大臣薨去あるる壽八十二才なり。前くふも統ゞく此人ハ倭國の名臣ふて。文学武学及び諸藝ふ通じ。唐土の軍術技藝の今の世まで日域ふ傳ゝる人多くを此大臣の傳授ふ據所なり。されど上一人より下万人ふいるる迄惜まるゝとの者なり。四年中將禪尼と呼まゝ奇特の尼公。和州當麻寺ふ於て遷化あるる。抑此中將尼と申ハ前ふ統ゝ惠美押勝の全兄從一位右大臣藤原豊成卿の息女なり。又豊成卿ハ大織冠鎌足公の孫正一位武智麻呂の嫡男ふて。舍弟押勝ゞ貪戾ふ引ゝ。篤実温和の君子なり。和漢の書典ふ通じ管絃の道ふも堪能ふて。聖武孝謙称徳三帝ふ事へ公の政を佐け。君ふ忠誠と

尽くされたる。君の御覚牙出度緒人の尊敬重くして。家自ら富栄られる。横佩の庄考を領せられると。緒人横佩の大臣殿と称する。緒代の雄堂に國岡将監時常とて者。其子源吾正庸二男藤六有忠と。父子三人豊成卿に仕私なく忠直と旨とする。豊成卿の北の方は紫典侍とて。元大内の女官なる。天のなせる美人にて。揚柳の姿婉娟。桃李の顔嬪娟なれど。君聖の御寵遇も他に異なりたれば豊成卿はまだ壮年の頃此典侍を一度垣間見て心に深く慕はれども。君の御覚めでられ女房なれど何と言よるべもなく。高根の花と余所のみ見なれるに。神亀の末天平の初の頃聖武天皇御不例にて玉躰易らせど。毎夜世満をする頃御悩頻なれば。大后皇后を首とし緒大臣甚く愁ひ典薬の官人に委ね。和漢の良方を考へ。種々の御薬を進めまゐらせども。更に其験もなく。緒寺の僧綱緒社の神官に命じて。加持

祈祷に丹誠を抽出せども。是以て其功なく。猶も夜毎の御悩止むべきなれば。陰陽の博士に占はしむるに。槿んざ奏へる。是朝家に怨ある者の死霊のなす業なれば。早く禳ひ鎮めまゐらせ。御悩愈御大事に及び給へり。大后及び衆人大に心を悩ま。行基菩薩弁びに名僧を内裏に召れ種々の妙法を讃誦させられ又ひるがへり緒卿に直宿させられ。茲に豊成卿は君の御悩を殊更に患ひ。直宿の夜毎に衣冠正しく弓矢を携て厳重と守る。忠中に八百禹神に祈誓し帝の御平愈を祈られる。或夜直宿にあるて例の如く宵より相結守れる。世満過る頃西一陣降出し。空中に怪しき者の声聞えるに。豊成卿須波化粧の者ごとくなれと。弓矢取て外の方へ出給へば。鳴て暴目の法を行ひ空を望んで三度弦前と射られたる。者の叫ぶ声凄しく聞えて。其後は音もせず。何者とも其正躰は見えざれども。其夜より君の御悩稍忌せるに。日を追て御平愈在られる。大后皇后と

先〻百官百司女孺命婦ふいるまで。千秋万歳と寿れまり治ぎるハなり〻。是ハ〻ぶ豊成ご蚤目の功なりとて。君の感感斜おぶまで。豊成昨年妻と亡ひる由なれどそさる奇縁ぶや。彼紫の典侍を室家ぶ給り。猶數〻の御褒賞とぞ下され〻る。豊成卿ハ思もうけぬ。年来想憧れ〻其人を給り〻く大のぶ悦び厚く帝恩を謝〻まり。舘へ将て帰り婚姻の儀或美〻〻執行ひそれより比翼の契濃やぶ。連理の情浅〻ぶ。夫婦の中ひとも睦じ〻り〻るぶ。本末太息の辞ぶ。天地者萬物々逆旅。光陰者百代之過客と賦せ〻如〻。実も日月ぶ関守なれば。何時ぶ千五年の春秋暮て。豊成卿卑五才ぶ成ぶ〻れども。いまご御子一人もなり〻れば。夫婦ともぶ只此度と歎れ相語てゆ〻れ〻ハ昔より神明佛陀ぶ祈て子と授〻る例鮮〻ぶ。ゴも佛菩薩ぶ祈誓て一子と授らぶまとて。初頼寺乃観世音ハ殊更御利益灼ぶなれど。國岡源吾ぶ侍女奴僕とり〻連

豊成卿御夫婦初瀬寺参詣あり〻一七日が間参籠。夫婦ともぶ普門品を讀誦あり。信心を凝して南無大慈大悲観自在菩薩。願望一子を授けまと祈念せ〻ぶ。信力の通じる所ぶ。七日満ぶる暁の夢ぶ。観音菩薩夫婦の枕頭ぶ来降り給ひ告て宣ま。你们夫妻丹誠を抽で一子と得ん事を祈る。其願望黙止が〻。我宿命天眼通を以て。普く三世を観通ぶる。你们ぶ子となる者ハ名因の者更ぶなし。然ども細行の切なるぶ任せ孫〻一子と授〻ぶ。御手ぶ持ぶ蓮花一茎を授給ふ。夫婦ともぶ睡をさめ。互ぶ夢のまゝぶ白蓮花一茎を授給ふ。夫婦ともぶ睡をさめ。互ぶ夢物語あるぶ同じ夢想なり〻ば。奇異の思ひをぶ。歓喜ある事限りなく。佛恩を尊まて種〻の施物を捧げ。救世観音菩薩と共ぶ敬礼拝して下向。従者を将て帰舘あり〻るぶ。実も観音薩埵の御利益空ぶ〻ぶ紫の前程なく妊娠あり〻るぶ。豊成卿の喜悦ハ更なり舘の男女貴賤ハ門の人〻ぶも慶賀の音

物と贈る使者門前市となり。こぞって勇み賑ひ合へり。斯て紫の前妊娠中の艱生を慎む。胎教の掟を守りて臨月より三月延天平十九年丁亥八月十八日晨日の將に出んとする頃少しの悩もなく玉の如き女子平に降誕あり。産室の内異香馥郁として恰も蓮華の馨に似たり。是初瀬の観音大士白蓮華と子授けの夢想も茲に思ひ合はれり。後年當麻に藕糸の曼荼羅を感得したのみも此因縁とぞ知るべし。唐手も相似る事あり。釈の少康法師は縉雲仙都山の人なり其母羅氏夢に星湖山に登りて天女降て一莖の青蓮華を与て曰是八十星祥天女の愛し給へる花なり。你是を懐ませ生育せば成長して世の善知識となるべしと。羅氏大に悦び手に受持とて夢覚ぬ。有身月満て男子を生し其室中青色の光明耀れ薫ずる香氣芙蓉の如し云々（宋高僧傳）豊成卿も北堂の平産有しとて急ぎ産室へ入り出生の姫を抱揚てうらうに実も

晉門品に設欲求女便生端正有相之女宿植德本衆人愛敬と統のひ經文宛転として玉を磨かるる如く殊に清なる事の紙に筆の舞足の踏を忘るべき喜悦ある事限なし。此旨一門縁侍の方へも告げ給へば諸方より出産を賀して贈らるる聘物の品々綾羅錦繡佳肴美酒山のごとく岳に似たり。些に國岡將監が妻も同年二月上旬女子を生んだ。今般幸の事あると時常が妻乳房を進めまゐらせ直に乳母に定められ其外傅の女房數多添られ心を風の中と深窓に生育。御夫婦掌中の花と寵愛ひなる。斯て天平二十年戊子八月十五日豊成卿御夫婦姫と乳母に抱せ月見の酒宴を催さ三夜千金の月を賞し琵琶筑紫琴あど弾させ奥ゆかれ来て十八姫が誕辰なれば門の人々も招請慶賀を述んとて夫婦結り合れる間に姫ハ妹女の膝を這下り有合料紙の筆を採て何か書のひるに

ぞ御父母首め一座の男女是ハ珍〻何を書のべぞと云るゆ

すゐせ寺　敕せの誓とあゝハしてをゝゆも法の國ゆ迎ん

と一首の歌を書つゝねゆゝなり。豊成卿も北の方も其余の輩も大ゆ驚嘆〻。是ハいゆゆいと難波津浅香山をも手習むぶるゆ歌とそ縁じて書のゆひ女人成佛の義をつゝねゆゝハ凡人ゆて在さゝいらゝる佛菩薩の御再縁なるゆゝと皆奇異の思をどなゝる。彼大聖世尊ハ四月八日ゆ藍毘尼園無憂樹の下ゆて降誕〻の時生まゆゝゆて七足歩。天上天下唯我獨尊三界皆苦何可楽者と唱ゆひ又吾朝の聖徳太子ハ御年二才ゆして二月十五日の平旦東ゆ向ひて掌と合せ南无佛と唱へ初言〻のひとゝゆ此姫君もこゝ二才ゆてゝる奇特の哥と縁じ書のゆ更実ゆ不思議の中の不思議とゆゆゝとて。御両親そゝゆ皆感涙とゞ流〻る。是より豊成卿御夫婦いよ〻

寵愛をゆ。片時も側を放さゞ慈〻育られゝる。茲ゆ豊成卿今まゝハ大納言ゆて在るゝ天平二十年己丑右大臣ゆ任ぜられゝ此時姫ハ三才ゆなりゆゝ

同年七月聖武天皇御位を皇女高野姫天皇ゆ譲せのゝ即ち改元あゝ天平勝宝元年と云。豊成卿ハ官位日のゝ〻家の繁昌倍盛んゆゝ萬の望〻叶ゝる更ゆゆれゝゆ猶此上ゆも姫の成長と待女御后妃ゆも備る者あゝ其こて老の本望ゆれとて。姫の成人あるとゝも伸さるゆ〻思ひ春ハ花園ゆ席を開た。冬の色香ゆ就て姫と寵〻。秋八月の楼ゆ宴を設て。緑竹ゆ寄〻姫と愛せられゝる。斯〻年月立て姫五才ゆなりゆゝ年の三月上旬別荘の桃花今と盛なるよ。邸守より報じゝれゝ豊成卿北堂姫ゆと伴ひ家門の親族を誘引して別荘へいらゝる。花下ゆ席を設け酒宴を促〻盃と取〻まれゝる。実や春風ゆ咲る桃の花紅白色と爭ひ八重も一重も咲満て。散も始ぬ其中ゆ

右大臣殿
東園の桃
と愛でしの
花盛の宴
聖徳太子絵伝前篇五
十六

聖徳太子絵伝前篇五
十五

芽張柳の糸長く。桃花に交りて風靡くる風情さながら錦と織るごとく。彼白樂天が花下忘帰因美景搏前勸醉是春風と賦したも余所ならず。不飽おぼえぬ心も浮立て客も詩を賦し歌を詠じ或糸竹を弾吹今揉朗詠して。終日の真宴に皆醉と尽されける。中にも或人豊成卿と賀しゝやうれるは。今日此桃花林に酒宴を催しゝ吏卿夫婦及び姫君のいづれも吉相なり。彼唐土東晋の代に武陵の漁夫桃源に入て五百歳の長寿を保ち又東方朔は西王母の園の桃を三つ食して九千歳を経たりと。貴卿北堂姫君も右の仙客にあやかり長寿を保ちなんと祝しゝやうれたれば豊成卿も喜悦限りなく。其日も暮れぬれば銀燭數多點じて終夜遊興を催されける。北堂紫の前衣襟の風にや抱れたりけん。何となく悪風に心地悩しく思れたれば豊成卿殿に酒宴を収めて館へ帰られ。頓て医官を迎て北堂の容躰を窺ひ奏

湯を勧めさせらるゝに始は只感冒の御悩なりと心易げにおもへども追て漸くに重くなり。呆は飲食も絶り。身体焦悴して日々に衰へて尽ん〳〵と豊成公はいとゞ更なり。御内人門中も大いに心を痛め。普く天下の名医を招て良方を配剤させ。諸寺諸社の僧綱社司に命じて加持祈祷させられけれども。定まれる天数にや何まも效を奏せず。時は是水無月半ばなりて。例年より暑熱酷しく。北堂は只弱りに弱り。今は頼み少くぞ見えける。豊成卿は大いに心を悩まされ。昼夜病床に居て看病あり。神仏に祈誓し萬望今一度本復させ給へと祈り願ひ給れども病者は漸くに衰へ増り。今は斯よと思れ給ふにや。重ね枕を揚て豊成卿に向ひ妾今は命生涯とも覚へ侍るぞ。とも則添よ〳〵せ〳〵と此年月の御情深く。鴛鴦の食の裡に比翼を契り。珊瑚の枕の上に偕老を約し侍しも其甲斐なく已に現世の縁尽て永く別をなすとも。君百年の後は九品浄土に於て

一蓮の契をかゝむとゝやされゝるゝまゝ。豊成卿落涙あゝて是を曉し。誠に
會者定離、憂世の常ゝて。大聖世尊も栴檀の煙を免まむまゝ。独未独
往の生死の道雖ゝ相伴ふと得ん。未の露本乃雫よりや後き前ゝつゝも
終ゝ八門ゝ道ゝ往んのゝ是今ゝ始めぬ事なり。御身八先達て九品上生の蓮
へ到り。半座を分て待ゝ我八暫ゝ現世ゝ残り。御身の後生善所と祈り。頓く
老命終ゝむ一蓮ゝ生と約ゝ。未来ゝ永ゝ契を為ゝと仰せるゝまゝ。柴の前八喜
ゝげる面色ゝく。其御祠ゝと妻ゝ為ゝ万部の御經ゝ勝り。善知識乃御
教化よりも尊くゝ有るべゝ。但心引るゝ八姫の事なり。妻ゝ亡ん後ゝて八妻ゝ
ゝり姫と懇ゝ慈ゝて生ゝ妻ゝ有ゝ。豊成卿點首。心安ゝ思ゝも姫の又ゝ
む爭ゝ疎略なる色ゝ。御身ゝ代り且ゝ心を用ひ育つ色ゝ。臨終ゝ心と遺ゝ八罪
深ゝ事とゝ。只後の妻を念とせゝ。一心ゝ佛の名号と唱へ其御引接を得ゝ安

穢浄土へ往生ゝゝと勧られゝるゝまゝ。北堂ゝ向ゝ姫と枕近ゝ招ゝ寄て其背を
撫さゝ。你幼くゝ母ゝ未期の詞をゝゝゝ妻現世と去ゝ。長者ゝ生ゝ萬
又上の御示ゝ逆ひゝ事ゝ。女八果和ゝ慈悲の心を事ゝ。召使者て恤ゝ仮ゝ
ゝ心ゝ持ゝ。又君もいまゝ年老ゝ。ゝとやゝあゝ。時移り日ゝ八後乃
妻ゝ呼迎へゝゝん。其時八後の母公と実の親と孝の心を尽ゝ孝行を忘りゝ
ゝ。微細と遺言ゝ。金波をゝの五夫や。憧愛の姫やとて。彼方と八此方と顧
ゝ妹女侍女雑ゝ。暇ゝ。南無観世音南無阿弥陀如来と數遍唱へゝ
姫も涙ゝ。幼ゝ掌と合ゝ佛名と唱へ豊成卿も称名ゝ。北堂臨終ゝ正
念ゝ睡ゝ。命終ゝ。姫を先ゝ有合男女ゝ放てゝ注悲ける
豊成卿も今更悲歎の哀涙ゝ勝を沾ゝ。注叫人ゝと制ゝ。亡骸と収め僧と請
ゝて種ゝの妙經を續誦させ。葬式の営ゝ厳重ゝ執行ひ。遂ゝ東仙一片の煙と

せんかなどと哀れなりける。豊成卿妻年到賤〜最愛の妻なれば。飽ぬ別を悲
しゝ。終夜經論を續絹〜。夜も明ぬれば流石ふ煙の迹もなるべく思れ。墓所
ふ到るべくもあらぬ。氣疎な野辺の草の露も涙を誘ふ媒となり。哀とかりし其人
名のみ残りて影も留めぬ。なる物哀物心を悼まぬなかりけれ。涙おさへ一首を詠じて曰

夜とともに思ひあまりて今朝なれば煙となりて消果ぬるか

斯なる絹〜て又ふりぬふ舘へ帰り。僧徒を結び專ら追善とぞ營まんなる

豊成迎後妻

継母奸計繞中將姫條

隙行駒須臾も任せぬ。光陰の移る更流水よりも早く。横佩大臣の息女まや
七才ふあれなるふ。弥生始の頃。妹女姫の心を慰めんと。別荘の花盛られば姫と誘
ひ侍女奴隷あまたを將て彼所へゆき花下ふ緋を敷あり。酒行肴を宛て酒宴を
なして遊び楽とくるる。忽ち下郎の小児一人走り来て。櫻の枝を手折んとくるふ

其母と覓し此者独来りて小児を荒く引戻し。殿様の姫君の御花見あるふ花を折
んとする支やあるとて叱懲し。兒さもと土ふ頭を付て一向ふ謝ふ児を曳連てぞ帰
りける。姫はくどくと見て。彼ハ何人ふて何由ぞ子を叱り連てゝ向ふ。妹女答て申
くる。只今の者ハ此御別荘の番人の子わさ。下くの子心ふ姫君の御前とも憚らぬ花
を折んとなりしを。其母なる者後の御咎を恐れ子を叱懲し御謝を申て子
と連てゝ帰りなと言上れば。姫宣て歩まれ下くの子さへも猶母あるふ。吾身ハ幼れ
時母公逝去のひてより母君なり。母公の慈愛ふ除ふ父上後の妻と迎むゝ。実の親
と敬ひ孝行おせとと仰有れども。ふるぬ又上後の母公を迎むゝぬ何由ぞと問ふふ
を妹女を姫の幼稚ふ似氣なく紀憶よれを感じ。稍返答ふあぐくるる。漸ふ答て
御又君も姫君を從し此母公ふ仕へさせまくとぞ。後の御墓と呼迎へむゝ為て侍る
ぬるとやなるふ。姫ハ首を打振ふ吾身ハ早う母公の欲れふて両〜泣ぬ。妹

女侍女们さゝぐゝゐ練めきゝ。花見もよゝ程ゐて館へゞ帰りゝる。昔釈尊未
だ悉曇太子とゆ五才ゐ成の頃。御姨嬌曇彌夫人御妹摩耶夫人の忌日
ゐ當りゝる日。菩提所へ太子と妹母ゐ抱ゝせて参詣あり。堂内ゐ入ゝ御吊ひ有
ゝる間ゐ。太子ハ傅人右将軍とゆ者ゐ伴れ無憂樹とゆ木の下ゐ遊ておハ
ゝるゐ折しも無憂樹の花盛ちり乱れ。悉太子子右将軍ゐ向ひあの花折ゝら
て得させよとのゝまゝゐ。右将軍承り心中ゐ思ひゝるハ五年以前今月今日藍毘
尼園ゐ。摩耶夫人此無憂樹の花を手折ゝんとて。太子右の肩より御誕生
あり。程なく夫人を亮去しの。ゝ。ゝ。ゝ今迄君其義を知ゐゞ。御母公の紀念
花を忍ゝ折取ゝと宣推さゝと。不覚懐旧の涙を流しゝ乱ゝ太子ハ其心をまゝ
ゐゞ。何ゆゝ花と折て得させぬやと責ゝ右将軍堪ゝ。彼花ハ君の実の御母の
紀念の花ゐゝゐ昔と紛ゝく在せゞとて折取ゝと仰ゝる御心なきゝと練ゝるゐゞ

太子ゆゝ咎めゝ。侍ハ九ゐハ城の母公在ゝるゝとゝれハ如何なゝせゝひしと問ゝ右将軍
包む吏能ゞ此六何とゝ隠しゝ。今の母公ハ御姨ゐて城ハ実の御母在せゝ其ハ
如此くゝゐゝ。摩耶夫人の逝去の始終を語りゝ申進せゝれゞ太子推ゐ御母
夫人の死去を悲ゝみ。是より御殺心の念始て萌しゝ。ゝとゞ其々実母の死を悼
ゝて仏道と殺しゝ。今の横佩の姫ハ継母とゝて菩提の道ゐ入ゝ種とゝ
後ゐゞ思ひ知ゝ。斯ゝく姫ハ母公のゝ乱を愁ひ豊成卿ゐ向ひ吾身ゝ幼ゝ内
ゐ母公ゝ後ゝ申ゝ世御身ゝ定ゐ見覚ゝ。願ゝハ又上吾身の
母公ゝ再ひ迎へゝ。ゝ。ゝ実の母公ゝ思ひ仕ゝ申ゝ。ゝ長者
しゝゝ。ゝ乱ゝ父の大臣。ゝ乱ゝ妻ゝ。ゝ。ゝ感じゝ乱程ゐ答へゝ。其
ゝゐて後妻ゝ迎へゝ。ゝ。ゝ彼為ゝ。姫ハ雨ゐつけ風ゐつけ。母公ゝ迎てゝ度く
ゝ望まれゝ。大臣も寵愛の姫ゝ。ゝ。ゝ其望ゝ叶へゝ。心ゐハ好まれゞ是彼

と其後妻ゐを求められるる。橘緒房卿の息女照日前とゝくるハ年二十と過ぬまゝ。其父母婚と擇ていまゞ何方も嫁がぬ。此照日前ハ雙なき美人ゐく。其面貌の美の前ハ粗似るゝ。是ゐ依豊成卿緒房卿ゐ婚姻の義と乞れ給るゐ子細なく承引有る也。即ち迎へ入て婚礼と調へ後妻ゐ定れる。豊成卿後の北堂ゐ申されるハ。予知命の年ゐ及び你て呼迎る事強ち色と好ゐハあらぬ。予ゐ一人の女ゐて後の母と望む事切なる也。此度你と迎へ入れ雅兒者を所生の子と思ひ不使と加へてゝと有れば照日の前ゐて。紙ゐ姫の御事ハ面貌美〻く智さゝくゐをゝ兼て世ゐ及ひ侍る。願ても得ぬ幸ゐて侍り。妾ゐ実の子と思ひ鍾愛ゐ給る也。爭ゐ隔心のゐ給れと答られる也。豊成卿も心安堵て深く怡ばれる。是より照日の前ハ姫と愛慈ゐ昼夜起居ゐ心を用ひゐ傳れ育られるゐぞ。姫ハ嬉〻実母と共ひ別睦びゐ片時も側を去ず繪き花結ひ合ゐ遊戯も。継母公と倶ゐ〻子心ゐも敬ひ傳れ仕へ給ひ〻り。継母も姫の親〻睦ゐ付て最愛き給ふ。師を請て琵琶ゐ琴ゐと習ハ〻ゐ習ハ〻る。天性聡明令利の姫なれば一度ゐ一事を再び忘る事ゐく。学ゐ従ひゐ追〻上達し。其教る師も驚嘆る事數度ゐ及ぶ。去る姫の凡音清雅ゐて声ゐ美〻。伽凌頻迦の囀る如くあれば聞者感ぜざるハなく継母照日の前も及ばざる所ゐ思れ。心ゐ恐を愧入まゝり。姫ハ絲竹の技ゐ堪能なるのゝ〻ゐ。手跡勝れ和歌と詠ゐ絲ぜれ給るゐぞ。父大臣ハ再雅得者と感嘆ゐ給ひ〻り。勝り給る。斯て姫九才ゐなり給る年の三月三日。當今孝謙天皇を女帝ゐて在〻れた。殊更宮絃の道を好ませ給ひ。今日桃花の節會行幸ゐ給ふ。三公九卿の侍廉中息女達の中ゐ絲竹の道ゐ堪能ゐる人撰まれ大内ゐ召れて宴會を催〻ゐ給ふ。右大臣豊成卿の北堂照日前ハ絲竹の技ゐ長ぜ〻ゐ給

あり。又其息女も幼少あり〻絲竹の技ふ妙なるよし。て天聽ふ達し〻ゑば即ち宣旨下て母子とも宮中へ召れ給。豊成卿大ふ喜悦あり。家の美目なりとて北堂姫とも十公ふ衣紋の綺羅を飾らせ燻煖く刷ハしと参内ませ給其他御擇ふ預り〻携家大臣の北堂息女達面〻ふ今見と曠と班ひ飾りて宮中へ伺候ありて各勅命ふ従ひ〻御簾間近く並居られ〻其光景錦繡文と荘り羅綾色と爭ひ沈水蘭麝の名香是ふ白玉添翠の髪ハ綽約として長く垂。婉娟〻る腰ハ束〻る糸ふ如く。盛れ眸ハ珠玉を耀〻し。絳を点ハ珊瑚と含ム。纖〻たる眉を揚挿の垂を欺れ嬌〻たる顔ハ芙蓉の花を摩む。将ふ是芳野初瀬乃さくら苍一時ふ咲高雄ふ田の紅葉同日ふ染〻ガ如。程なく天皇玉座ふ出御在〻皆一同ふ御對顔あり。上巳の御祝儀〻て桃花酒の御土器と賜ハ〻れ〻並居る女房達雖有天盃を頂戴あるて。御寿千代万代と祝〻すれ〻る。天皇龍顔麗〻く錦〻絲竹を吹弾ぜれ〻り〻紹下り給ふ。内侍司藏司奉〻り給れ〻ふ指揮宋女。女孺の女房手毎ふ楽器を捧出琴瑟琵琶箏の琴尺鼓羯鼓篳篥笙巢描笛等を席上ふ並ら列む。内侍司其役〻とで〻ハ〻る。中ふも照日前ハ和琴姫ハ箏の琴の役ふ當り。其他の女儀達も指揮の楽器を抱各衣紋を刷ひく絲竹とど吹弾奏〻る素〻ふ撥出れ堪能の人〻なれ〻ば面〻妙手と尽し今日を一期の曠業と調奏〻る〻ふ。管絃とも或合〻或ハ離き恐ゞ〻く弦る〻如く心詞も及ぶ〻ど。琴ふ於く君も玉冠と傾けて聳聽在し。殿中ふ参列をるところ乃宮方内親王月卿雲客女孺宋女まで心耳と澄して空入彼西方浄土ふ奏をる。歌舞の音薩の音楽も是ふハ〻ハ優〻と。人〻感歎ある其中ふ豊成卿の息女ちゞ〻づ〻九〻の手技ふ〻。衆ふ勝れて爪音清雅ふ〻。程拍子序破急撥ひ音或ハ高く或ハ低く。群雀の中ふ鶯の囀る〻如く。一除耳を〻〻御素天と翔る會

も羽をくじめて飛ぶ志を池に游魚も鰭を休めて躍出るゝと覚ゆる。古塾巴
とゝ〳〵琴の名人の風音に池中の魚鱗躍出厩に繋る馬は仰て秣を食と
荀子勧学の篇に書しも此姫の編ぶ如ざる歟と君も御聽と競ひ給ふ
斯く管絃も果れば天皇衆女の技藝を御賞美在り殊更豊成が女の風音
一入勝れて今日の管絃中の第一なりとて恭なる君の御手づから玉の斝を正賜り
久り却て継母照日前は御寵衰美の御約も下らざり給ふ心中に深く耻らるに姫
乃名誉を晴に姫く始く継子を悪む幼一念慈に萌るゝ薄情うるゝ凡
劣れる婦女子の常なり一時の遊藝の優劣に依
て寸も睦じ給ふ継母継子の中忽ち仇敵の思なり姫害の毒心を生ずる
吏素り前業の逆むる所なるべし斯く君より女儀達へ給ふ御引出物と
給り皆御暇を下され給ふ照日の前も姫と伴ひ乗物に揺れて帰

館あり給ふ早先立く姫の誉の吏館へ迎え給ふ豊成卿待ゝて姫を迎へ扇を
立く誉賞され給ふ照日の前も昔の倶に賞あり給ふ胸の焔は猶盛に憎む心を
弥増る其年も暮て明ぬ姫八十四に成給ふ継母照日前は去年の夏の
ゆゝ妊娠し給ふ今年天平勝宝七年二月に平産あり男子出く有り
豊成卿の書状に計り給ふ早観世音に祈誓して子を得給ふ女子なれば家を嗣き
人吏如何と思ひ今男子を設し吏四上の大慶なりとて豊立宮と名を呼れ寵愛
ある吏限り姉姫も弟の出生あるゝと二方く嬉しく悦び且夕抱給ふ愛し
いとゝ思ふ継母は大内の管絃より此姫を悪む豊成卿の左右前に諂も
隔なく体にすてゝ良人の蔭にて其とく難面吏度くに及ばれども姫は実母
の遺言に後の母公を実の親と思ひ孝行を尽すと言ふ共推て耳に入
ず覚へ時の間も忘る吏なく継母の吏に触ては難面と少も恨とも倍敬ひ仕

其難面を仮ふ日ハ〻むぐんるも。流石雅心ハ延母の貞色の折く悪ハ〻ハ付
ても。実母の暮ハ〻く。佛間ハ入て実母の位牌と拜し。ハらはと泣ハ〻更度くなるぞ
痛ハ〻くるる。実や貴も賤も延〻れ中の気ハ〻ハ并心苦れ物ハあるとても
他人と他人の寄合て親子となるハ一世るるぬ深れ因縁あれハ延子とあ〻
憎むまぢれ更なり。見ハ且あれ姫ハ斯亡母公と意慕ハ付ても。せめて孝親
のあと佛前ハ花と供ハ香と焼て其霊を祭りのひるるる。何卒経一巻ハ
も續習ひ母公の菩提を吊ハるやと。雅心ハ望を裁〻。一時又の大臣ハ向
ひ。吾身と先亡ひ〻母公の御吊ひのあハ。御経を續ハ〻思ひさるハ
む御経を教るる御僧と迎へむるひと願れるるハ。大臣感涙と流〻
さても你ハいまさ雅れハ殊勝ハる望を起せるハ。されも續経ハ〻ハ成人
世と知身と成てるとるれ雅れ者の為ハれ業ハ〻ハ此義ハ志ハ〻く思

るとまるハ。其志ハるとハ則ち母への孝心ハれ亡母もさるとハ嬉く思ハるあと止
めるれども。姫ハ神ハ〻仰きる妻ハも母公の御位牌と拜し只ハ御念佛を
唱ハ母ハ物足ぬ心地ハ。何卒御経を教給る御僧と迎て給ハと
強て願ひるハ。大臣も其志ハのあるると感ハ。道徳高れ老僧と招れ姫
の願ひのあもむを語り。姫ハ望まのハく可ハ経一巻續習ハ給へと頼ハ
やれれハ。老僧感ハ。さても〻世ハ奇特ハる御更ハ。漸く十ハ乃姫君
ハ〻難有望を起ハ〻ハ更ハ。ハ中の運とも〻ハ。それ慈母報恩の御為と
ハ〻ハ。称讃浄土経ハ如ハ。抑称讃浄土経とハ。ハも釈迦牟尼如
来給孤独園ハ於ハ。阿弥陀佛の名号及び極楽世界の功徳荘厳と讃ハ
ひ。罪業深れ男女ハるも。阿弥陀佛の名号と信念せば。極楽浄土ハ往生
るるとと説ハ〻ハ。故ハ称讃浄土経とハ号ハ〻ハ。此御経を受持ち

讀誦するは亡父先亡の靈成佛得脫する事疑ひなど。其讀誦する人も多
の大乘經典を讀持つ功德と異なる事ハなどとなれば。大臣深く信仰あり
即ち姫を呼出し老僧ハ見へ給ふるぞ。姫ハ嬉しく老僧を敬礼あるる。老
僧も答礼す。淨土經を開て句逗清濁の讀法を懇ふ指南し給ふ。茶
頭悟令利の姫なれば。一度聞て頭に覺へ。二度聞て能讀誦し給ふ。老僧
驚嘆して。是ハ凡人ハて在まず。と感じ。父の大臣へも其由告られば。大臣喜悅あ
りて。僧ハ商と設て饗侍し。多の布施を与て歸られる。斯て姫ハ望む所
の經文を習覺し其の願叶ひ。悅び淺からず。それより母公へ報恩のため
毎日佛間ハて称讃淨土經を六卷づ讀誦し。一日も懈怠なく。如此幼
稚なれ孝心深く。天性心柔順ハて。召使男女ハ情深く。萬幼稚ハ似氣ふ
く長者しうるれば。諸人賞譽ものなり。姫十二才ハ母公の水無月故

母公の忌日ハ當り日姫其墓所ハ詣ハ乃更ども思ひ出し。今の母乃
雖面ハ付ても実の母公の世ハ存命在まずとなれば。なほ悲しく
懷旧の涙せきあへず。困ハ御經を讀誦あり て後

まれハまて紡もきびしく松風と常ハや苔の下ハやすん

と一首の歌を詠じ給へ。館へと歸りの入る。諸人此歌を傳聞
感情を催し袖を沾さぬハまなし。継母照日前ハ姫の年と重るハ從ひ
倍姿貌ねびまさるのいと艶し。愈々智の增とともに。姫を悪く咲の内ハ
砺如何もして人まれも亡ハなやと且夕其使を窺へども。姫ハ萬の孝止平
父母ハ事へ孝心深く。一点の過失もなく。良人ハ絶言も多く種
もなく。皆と離て足を搔心地し。堪うして我親里ハの所人山下遠内と
武士と密ハ招く声を低て言ふ母ハ其方も知て。當館の姫と妾ハ。何

ある過去の悪縁ふや。久隔おき妾を忘婦ひ。時〻又親へ悪さるふ讒言と
ヤふよ。良人も実子の愛ふ溺き其幻を信とて。稍妾と疑ひ忌疎ん
ぶ色あり。妾豊尤と云子とさへ殺けさるふ。今更離別せんてハ。又母子
家門の人〻ふ何の顔有てう面を合とべき。依て自害せんと思ふ。妾ぶ
死〻る後夫豊成卿へ姫の悪〻の愁ハ一さふ世残去と言上てよと。空泣の
涙とともふ絡り〻れハ。遠内ハ其偽言ある成知と大ふ驚死。是ハ短慮なる御
妻ふ姫君の魂言と厭ひ。ものといふ。御自害ふ及ぶと。小臣暗ふ姫と切害
し。何者の所為とも不知ふ汁ひ。必ず短慮ふ御身と過ちをい
と練るふ。ぞ。照日前満顔ふ咲を含〻。其紛のごとふ妾ふ何とう
患へ。ぞ。さ〻ぶ無慈悲ふ。ある妻ふハあれど姫と人まれど失ひてよ。其恩賞ふ
ハ。妾ぶ児豊丸ぶ世とあ〻ぶ。你の子小遠次と犯権職ふ犯を考への領地

を上へ回国ぶ上ふ。子ども。ぶ。你の手ふて姫と害せ。妻露顕ふハ妾ぶ
身も連座の罪と道きぶ。能く思慮と廻〻。妻と仕損じる妻ふ。是ハ
当座の寵愛美どもて。砂金一包与へれど。元来貪欲の遠内大ふ悦び。
幼年の姫君刺殺人妻ハ鼠と殺とも易くい。面と塗行。盗賊の体ふて
舘へ竊入切害。ハ人ふ。維う小臣の所為と知ひ。ぶと妻もなげふ背ひる。ふ
ぞ。照日前深く怡び猶細くと密妻と言含ると。遠内領掌。一眼を昔て
己ぶ私房へ帰り。子小遠次と密ふ招。照日前の頼の密妻と絡り。ぶ。
ぶ。小遠次。ふの外ふ強。是ハ。ものとも又の御心ふハ天魔破旬の入替りふ。我ふ父子
御墓所の附人。ぞ。当舘へ参り。動仕る。ふ。姫君。生君。ふ。幾ふ切害。
ぶ。是主殺の大罪人。ぞ。罪三族ふ及ぶ。ふ。ふ。緒人の目と欺れて
身の罪名と隠し。遂ぶ。天罰と争。免ぶ。終ふハ主殺の悪名

露顕し。爰とくの母も愚男も厳科に行はるゝのゝあるべき。御墓所も罪と免れぬべきなれども。然で御墓所忠郎にあるべき。却て大不忠となりぬべし。抑當館の姫君は。御年いまだ幼稚とは申せども。尋常の女子とは異なりて。利発聰明成こと年の長ずる婦人にも優り。御両親に御孝心深く。萬の行ひ一点の御過失も在まざるに。継母公と御父繞言のよる所。主御墓所の忌憚りの為に恐れ。継子と憎みもしての事ぞ。只幾度も御練言申すこと臣下たる者の道にあらずと。紙を尽くして諫めたれども。父は却て眼に角を立て。賢れ你が利口を。左程の事と你に教へるぞや。姫も主君の片端なりとも。我は楠家の臣にて。北堂の附人となり。當館に来り仕へむ真の主君は北堂なり。其主君の生害し給へと。臣として余所に見る理有んや。よし人を主殺すも言むに女主の妨となる姫を討でや有べき。我忠臣と

見こゝろひて一大事と明し頼まれぬ。誓を立て領掌せるこゝろぶり大丈夫の一言は駟馬も追ひ難し。況や主君に背き言とや。事露顕して刑罪に行はるゝも主人の為に捨る命露惜しからず。你も某が子なり。善事も有悪事もあれ。親の言に順ずる子たる道あるべし。有無の反答に依て所存あり。と刀の柄に手を掛。否と言ば手討にと色を顔色なれども。遠次其様を察し。絆と打咲ひ先の如くやせ。父の心を引受人なり。左程まで意を決し。上は愚男も安心せり。此上は父と同道して事を仕遂さるべし。幼稚の姫を討人に両人忍び入るも却て人も見咎め事の妨となりぬべし。依て愚子は明衣館の結所に相結直宿する体にもてなし。父の忍入を見咎て支る者あらば。それを拒き討あひ。其間に父は姫の居所に踏

こゝて本意を遂の人能く面を包み姿を修装して人の見知ざるように

夢と覚へ、ゝ不言れず。遠内怡び。其ゝてゝ我男なり。穴賢人ゝふ悟りを
そゝて。密ゝゝ手筆とゞ示し合るゝ。遠次ハ又ゝ別ゝ私房へ入たりゝ心
中ゝ思惟るゝハ我又慮り浅ゝ御墓の刻ゝ瞞れ罪ゝ被て姫君と害せんと
欲せりゝれとも。岡崎将監ゞ妻ハ女ゝゞ男優りの女ゝて。姫君の側を去
ざ守護まれず。容易ハ紛ざるゝ。吾朝の阿部仏丸ハ敵の矢面ゝ立て
仲哀天皇の御命ゝ代り。漢土の記信ハ高祖の身ゝ代りゝ項羽ゞ為ゝ焼
殺れ。倶ゝ忠義の美名と青史ゝ遺せり。我も一命と捨て姫君の危急を
救ひ。且ゝ父の心を善ゝ飯せゝんと思慮て定め密ゝ所存の程と一通の遺
書ゝ書紀ち。翌日岡崎将監の宅へ行子息源吾ゝ対面し。近頃平ゝなる
や夷あゞゝ愚子一昨夜り昨夜も。姫君人の為ゝ切害せんまゝと。両夜とも門
ゞ夢を見いゝ心中穏ゝなりゝゞ。ゝゝゝ依て悪夢の虚実と試んあ今宵

姫君の御殿の庭の辺ゝ直宿て勤番仕りゝい。御辺ハ次房ゝ直宿あて。出
ゝゝゝ。ゝ難固ゝ。時ゝ見廻り用心怠りゝまゝとやるゝゝ。源吾日来忠直
なる小遠次ゞゝ夷あれ。ゝ黙首。先以て姫君を大切ゝ思ゝて。ゝゝゝ満足
せり。連夜不言の夢を見れハ怪た義なり。夢ハ虚妄の物ゝゞゝ実夢ゝ
ゝ言ゞゝ。ゝゝゝ如ゝ愚子ハ次房ゝ直宿て終夜勤番をゞ。御辺ハ御庭
ゝ在ゝ守護りまれゝと答れゞゝ遠次重て。思ゝ子細のゝゝ。今宵我ゞ御庭ゝ
忍で直宿ゝる夷と。御賢文ゝゞゝ内邸の人ゝゝゝ敷ゝ知せるゝゝと。岡崎別と
告て我宅へ帰り。其日の薄暮より館へと出仕ゝる。岡崎源吾もゝゞ黄昏
頃ゝゝ出勤て。姫の居間の次房ゝ直宿。障子両戸を鎖固ゝ。出入者と悉く
改め。少し油断ゝ時ゝ見廻り。心と賦て守護ゝゝ。遠次ハ頭巾眉深ゝ被て
面体と隠ゝ。衣服も平日と異ゝゝゝ。姫の御殿の庭のゝ隅ゝ身と忍び

又遠内の霊耦び入をゞ窺ひ々る。斯て夜ハ漸く更て遠寺の鐘四更と報じ紙も
密雲天に満て月刺も去らぬ暗夜に。山下遠内ハ忍姿に覆面し。時矣と
舘の堀除なる見越の松樹と傳ひて高塀を乗越庭へ走り立て姫の寝所へ
潜足して忍び寄る。疾より窺ひ居る遠次声をもらみゞ後より無閑と組
付く。遠内ハ我子と、敷ものもあるゞ愕然として偖ハ監平の見処なりと心得振ゞ
ゝ太刀抜放し。只一刎と斬込を。遠次も太刀を抜合て受留おのゝ父の身に
過ち有せじと。太刀の揀わ切結び只切て帰せんと働けども。逆勢の遠内勇と
奮ひ踏込〻〻斬込るゞに遠次ハ敷ヶ所の重手に眉眼暈て仆る所を
遠内得たり乗うを。終に止めと刺す。此時舘の内に源吾直宿して居す
るゞ外面に太刀打合す音の騒ぎ孩れ。追取刀して大声に維。在庭中に長
盗入ると覚るゞ出合て搦捕よと呼ゝるゞ遠侍に在合武士ども騒に

目を覚し。弓よ太刀よ拒火よと騒ぐ。遠内を源吾が呼ゝり一声を聞偖ハ今實ハ
便宜あり。愚息ハ何ぐゝ。何分見咎られて八面倒なり。重て本意を達すべし
逸足に高塀に乗上り。身を躍て外(私)下我家に臨て逃帰る。源吾ハ七人乃
武士に拒火を振させ〻孤出て見れば。早曲者ハ逃失て影も見えず。隈〻を
捜に廣庭の隅に仆れ者あり。依て拒火を振て其面を見れば。頭巾深く
被れ異者に次を紐装ども。将く山下小遠次なり。敷ヶ所の手と負己に呼吸
断り。源吾大に驚て偖ハ遠次曲者と闘ひて刺違と覚ゆ。早く出合
て加勢せば。斯あなく刺をすゞれを。時後れぞ残念なれ。今朝小遠次我宅へ
来り。姫君害に遭の夢の悪夢を見。其虚実を試んと庭中に直宿せんと
言つるゞ悪夢ハ其身と云て凶兆なりと。偖曲者當舘へ霸入ハ何の為も
察し難し。姫君を害しなるゞ。其ハ且くおき君乃

御為ふるべき者と紂せ〜吏の惜さと悔と急ぎ山下遠内が方へ告知せうと下部を走せ出る。遠内ハ我家ゑ帰り息吐ぐ在る所へ源五ぐ走せ出の急使走り来り。御子息小遠次殿館の廣庭ゑて何者の所為とも走ぐと紂まの〜り早く来りて光髓と捻めうと紂せ〜告るぞ。遠内大いゑ仰天し。心中ゑ思ふハ先刻監率なりと思ひ紂て捨〜ハ愚息ゑ有るまじと俄ゑ心強だ〜。取物も取あへず使とゑ館へ走り行指火の影ゑ照らんで彷もかた一子ゑ遠次ゑ〜るゆへ〜〜殘れ肚中ゑハ偖も不便なる業と去て〜〜と。千悔されども其甲斐なし。我手ゑ掛〜と言んやうもなく。さあらぬ体ゑて源五ゑ向ひ。愚息ハ今宵御館の結所ゑて直宿仕んと申出勤〜いゑ何ゑ此所ゑて紂まいひんと何ゑ殿の御威光を以て。當の敵を穿鑿なり下されいや。源五ぐの頼入いなりとて。愁涙とおさく我子の亡骸と轎ゑ乗下部ゑ舁せて我宅へ帰り来る。遠内が妻ハ我子の光髓と冒るゑ入るより大ゑ驚れ。夢とぞ思て。空〜れ死ゑとぞ。声を放て愁傷する吏限なし。遠内ハ妻ゑも我切害せと言んやうもなく。強欲不仁の邪念も消失心中ゑ後悔するぞ〜なり。斯て有果ぬれゑあ〜ぐれで翌日往く野辺送して一片の煙となり。僧と結ぐて我子の後世佛果と吊ゑ。我子の遺物もあつ〜くゑ遠次の手函を開とるゑ中ゑ一通の遺書あり。急ぎ操披れ見れバ文玄練まぐも承引なく。光と以て文を練め善道ゑ皈せ〜んとゑ。絳と姿と変て父の手ゑ〜ゑ光とる由の文意と微細と書紀り。遠内腑を噛で後悔。我御墓の患ぬ除ぬ子孫の後栄と計らんと一図ゑ逆り。却て我子を切害せり。実や天ゑ向て唾を吐とゑ天を汚と吏能ぐ。却て我身と汚ぬとの古語も。今我身ゑ思當まり。是一應実不忠ゑ乱ぐ罪あれ姫君と害せんとせ〜過りとり此愁と釀〜り。肉身の我息と手ゑ〜ゑ何を頼ゑ世ゑ送るぞ。今ハ仕を辞〜出家入

道して緒岡の霊場と順拝し。我子の佛果を祈んと。妻ふ其意と絡れば。妻も
同じく世を厭ひ思ひ。もふ尼法師とまゝ〳〵と望を乞ふより。遠内是を
聞き。北堂照日前ふ願ひ今般愚息が不慮の横死ふより。老病殊に勤
仕なりがたく間何卒御暇を給りたく乞ふ。其願ふ任せんとも（遠
内怡び夫婦とも髪とも。或僧と戒師ふ頼み遂ふ出家得道し所有緒
岡の霊場霊佛と順拝して我子の後生善所と祈り夫妻とも殊勝の道
心者とぞ成ふる。嘉忠なるふ遠次孝なるふ遠次。其一命と抛て姫を
救ひ又を事ふ成せし也賞とも高餘ある若者〳〵

継母毒計害却実子　再度奸計中将姫陷巧更

横佩の後妻照日前ハ山下遠内ふ命じて姫と害せんと巧るふ遠次ぶ横
死ふ因る。遠内仕を致して出家しれば兼ての心巧を画餅となり此上ハ何

〳〵て姫と亡ふ者とと尚も奸計を心中ふ画〳〵る。其年も暮て明れば姫ハ十
二才の春と迎へ豊九ハ三才ふなられる。照日前ハ日夜姫と縛んと思ふ悪念止
時なく。百般工夫をめぐらし中ふ弥生の節句ふもなり名れば継母忽ち一計を
案じ出し。晴ふ毒菓と取寄草の餅を制て其ふ包ふ交姫の居間へ携へ往
飾ふ雛棚をふかざりて。偖も美麗く雛を鍬りゆひ〳〵ふ。妾草の餅と綱へ
〳〵り。殊更心を竭して製〳〵れば。侍女们ふとせど。雛ふ供〳〵後ハ御身一人楽と
ものとて。菓子盞ふ盛て与るふど。姫ハ大ふ怡び押戴れて。とりあへず雛棚へ
供ふれ申ひる。継母仕も多〳〵なりと心中ふ咲て我丙舎へ帰られ〳〵。此時乳人侍
女も居ざりれば。草の餅の吏と知者ふり乞ふ豊九ハ平日ふ姫と睦び親〳〵
時〳〵もなく姫の弔間へ往通へば。乳母とも連と参り来り乞ゆ。姫ハ寵愛の
豊九なれば。掻抱て雛と見せて慰め居る所へ。人の侍女参り来り。殿上已の

繼母の奸計姫
を毒殺せんとす却
て実子豊吉此災
を陷る因果応報
今昔の音響
ろくのすけ

中将姫
ろくのすけ

御叅内なるに、只今御帰館在ませりと告れむ。姫は又大臣の帰館と出迎んとて豊丸を抱き下し。吾身は又上の御帰りと出迎ひに叅るなり。阿子は此座にて遊び暫時待居よ。頓て来り侍るべしと。侍女を連て出迎に往るひる豊丸は只一人跡に残り。雛の調度などを弄び居れるに、草の餅を一つ宛へあれ稚ごろに欲く思ひ。傍に人なきを一つとりて食し。又一つとりて己が帯へ入んとしるに忽ち毒菓過り。苦と叫びて席上に仆れ。手脚を張てぞ悶へ苦る。照日前は彼餅を今や姫の食をりんと。密に我丙舎を立出姫の居間へ到るに。豈計んや実子豊丸口より鮮血を吐七轉八倒して喚れ苦る様を。大に仰天し。是はそも何時の程に此所来りやと心地惑ひ。抱起して如何せんと騒ぎる内に姫は斯とも知ずして。乳人侍女を将て居間へ入り来り。此体を見て驚き歩殘れる泣悲しみの乳母侍人も騒ぎ惑ひ。為よ水よと呼まるるぞ。豊丸の乳母も

此騒動を聞付て足も空に駆け来り。殘れる泣て某を呑せ水と含ませれども其詮なく豊丸は苦しみ悶へ其面色紫色に成て終に空しくなりぬる。又大臣も斯と聞て斜あるべき殘れる姫の居間へ入来られ。豊丸の変死を見て愁傷限なく若の手を握り。草餅を人々。餅に毒菓と入るるにて。手飼の鷹鳥犬に残りし草餅を与へ食しつらるに忽ち血を吐狂ひ回て仆死しぬ。侍者も餅に毒有に更決しても折は乳人侍女に姫の傍に居ざるべし。維が贈りしものを。依て其由を上る。独照日前は身に冷汗を流しむ。其色も人せず。我子の屍を抱て泣居る大臣は姫に向ひ彼草餅は維が贈りしと問れるに。姫は稚心に継母の毒害せんとの巧みなる我知るとも。明白に言ずば継母の罪に落人更と厭ひ憎と維が供しとも知ざるよ。答ずとも大臣甚だ訝り。斯ては其本人に明あるべしとて。厳重に将監

を呼出し、若公の毒丸を絞り。館中に奉公する所の男女婢女奴僕に、造作厳しく毒針を巧み、犯人を穿鑿せんと命ぜれば。蘇生する事、やそ。普く医師を召寄せ、針灸医薬の術を施させるれども。六脈とも絶色変じ五肢冷切れだとても医療のおよぶ所に非ざると、表医言上するおそ。今は絶望の術もなく。終に屍と棺に収め葬式の営をぞせんける。岡崎将監は館に仕る男女と入で呼出して。姫君に草餅を献じ者や有と厳しく穿鑿されども。誰一人其ぞと覚へる者もなく。皆毛頭存ぜざる由言ふより。将監も穿鑿に悪く果ある。時に子息源吾家に又ゆかる人先年館の庭中にて山下に遠次が面を包み姿と変て横死せしも。何者の所為とも知れども。渠悪逆を人とて。好人で姫君の御丙舎の庭前に直宿して討れしは不審に所今で般き姫君と毒害せんと謀し人是決て勤仕の男女の所為にはいなで。疑くらは御臺所の心術より出し義にて。人々彼附人山下遠内其子に遠次が討れし後俄に勤仕を辞し夫婦とも遁世出家せしも。御臺と縁りての人道と思れやとやゆかる。将監もうち黙頭。我も北堂の心底をうかがひ変人。此上は今一應妻に命じて姫君を賺し同落せんと。妻と呼出して。如此く言て姫君に実夫を同落せよと言含るおそ。妻さし心得て館へ出勤。傍に人あれば折を見合せ密に姫に向ひ種々幻を尽し。賺し練らんと餅を贈し人を向れども。姫は尚維とも其人をさしも筆と執て

ちくるもよせくる方ふくるかり人を難波のあしとかりひと

と一首の古歌を書てよへ何変もやれぬれば乳人を歌の意とちくぞ。其ゆく懐中に納め。立帰く夫将監に右の歌を見せても姫君餅の贈主と告ぬぞ。此奇と書て給りぬと言るぞ。将監は嗤て眉を皺め。此古歌を晋門品の還著於本人とある経の文を題して絵し奇なりと中の及ぶる。盟ふ姫

君毒餅を贈り人の名を明らむるど。此古歌を書て給ひ。其本人の罪と著さ
と深く其名を包まゝなり。是を以て考れば。よく坐て北堂の胸中を疑ひ
你今より片時も姫君の側を去ど。御膳部菓子及び湯水まで試毒させ。万端
小心を用ひ少も油断なく守傅れと急度命じ。妻女心得其より日夜勤
仕て。姫君を守護し。食物は仮初の菓までも侍女に試毒させ。北堂に心を置て
緒吏に氣を賦り姫を大切に守傅れ。且鋭延母照日前は毒茶の奸計に
あらざど。却て最愛の実子を毒餅の為に亡ひ悲歎限なく。追慕の念
止がたに付て。姫を我子の仇敵と恐れ。何卒豊成卿に強く言し追失んと昼夜
心を困り。扨者嫉妬の悪念を恐るし。遂に朝廷に孝謙天皇藤原仲
麻呂豊成の弟を御寵愛浅からざるに依て。仲麻呂君寵を繕り我意の行条多くし
て大伴古麻呂橘奈良麻呂以下仲麻呂と悪く伐亡さんと謀りて密謀露顕し